



Uttarajjhayaの諸伝承

著者	河? 豊
雑誌名	筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報
号	25
ページ	19-30
発行年	2014-08-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1219/00000446/

Uttarajjhāyā の諸伝承

河 崎 豊

Recensions of the *Uttarajjhāyā*

Yutaka KAWASAKI

0. はじめに

白衣派ジャイナ教聖典¹の本文伝承が幾つかの次元で問題を抱えていることは、しばしば指摘されてきた。その伝承の殆どは単一の recension に由来すると指摘されるものの²、そのような伝承下においてすら本文批評に困難がつきまとうことは、白衣派聖典に触れた者であればよく実感できることではなかろうか。これまでの研究によると、5世紀に Devarddhi によって主催された Valabhī での聖典編纂会議の場で、過去に Mathurā と Valabhī で開催された聖典編纂会議における両伝承の相違が調整され、あるいは原典や註釈に異読が記されたという³。一方、11世紀後半に活躍した Abhayadeva は、聖典に複数の伝承があり、また写本には種々の欠陥があったことを、自身の *Thāṇamga* 註で告白していることが指摘されている⁴。聖典編纂会議以降も — それが歴史的事実として — 読みが固定されず、あるいは誤伝もあり、流動的だったことを示す一例と言えよう。

そのような白衣派聖典の中でも、*Uttarajjhāyā* [Utt] は比較的多く本文批評の俎上に載せられた経典のひとつだろう。Ludwig ALSDORF による一連の研究を筆頭として、本邦でも谷川泰教、山崎守一、渡辺研二らによって精力的に研究が行なわれてきた。これらの諸研究では、言語学や韻律学の知見、仏教やヒンドゥー教、また空衣派の諸文献に存在する類似詩節との比較といった手法を用いて、Jahr CHARPENTIER 校訂本の是正や詩節の意味確定に力が注がれ、現行 Utt の読みの確定や、その理解に多大な貢献がなされてきた。

しかしながら、本文批評に際し「註釈家たちが伝える別の伝承 (pāthāntara) をどう扱うべきか」という点については、言語学や韻律学、あるいは類似詩節との比較といった事柄に比べると、十分に考慮されてきたとは言い難いように思われる⁵。現行の Utt ではなく、原 Utt を可能な限り

厳密に考えるなら、註釈家たちが伝える pāthāntara は、それが如何に些細な相違でも大なり小なり問題を引き起こすであろうし、現行 Utt がいつどこで誰によって固定されたのか、という問題を考える上でも避けて通ることができない。本稿は、かかる問題を考える端緒として、試みに Utt 2 章に現れる幾つかの pāthāntara の事例を示し、Utt の本文伝承における pāthāntara について問題意識を共有することを目指しつつ、若干の議論を行なうものである。

1. Utt 2 章の pāthāntara

Utt に種々の pāthāntara が存在することは、CHARPENTIER が Utt 校訂本の巻末に記した注記にてしばしば指摘している。但し、Śāntisūri による Utt 註 *Śiṣyāhitā* [UttŚ] については、彼は写本から確認し得たのみであり、UttŚ 以前の註釈家と考えられる Jinadāsa⁶ に帰せられる *Cūrṇi* [UttC] は、彼の当時は未出版だった。その後、pāthāntara を大々的に回収し読者に提供したのが Jaina-Āgama-Series [JĀS] 版であり、それらは各詩節に対する注記の形で組み込まれている。

さて、このような pāthāntara を眺めているとすぐに目に留まることが幾つかある。ひとつは、こういった伝承が基本的に UttC あるいは UttŚ が提示するもので、UttŚ を承けて Nemicandra が著した Utt 註である *Sukhabodhā* [UttNe] ではそれが皆無である、ということである。既に指摘されている通り⁷、UttŚ が提示する種々の解釈や Utt の異伝承を、取捨選択して解釈や読みをいわば一本化することで理解しやすくすることが UttNe の目的であったから、UttNe にとってこの措置は当然である。ただ、このような pāthāntara は、少なくとも Utt 2 章に限って言うと Utt 2 章自体の写本の異読としては既に残っていない点、また Utt の諸写本が示す読みは UttNe で一本化された Utt の読みと一致する点という、以上 2 点についても注意が必要である。なぜなら、この諸事実は一見、UttNe の一本化が現存 Utt 写本の読みを固定した状況 — UttNe が（結果的に）Utt の editor の如き役割を果たした状況をも予想させるからである。ここでは、そのような可能性も視野に入れつつ、Utt における pāthāntara の実情を UttNe 以降の諸註釈も用いて、具体的に若干の例を確認したい。以下、本稿で用いる諸註釈の情報を提示する⁸が、現代の白衣派の僧尼がヒンディー語やグジャラーティー語、あるいは英語などの現代語で執筆した註釈については、今回は考慮に入れていない。また最古の註釈と考えられる *Nijjutti* については、少なくとも Utt 2 章に関する限り今回の問題に関与するところがないため、用いない：

註釈者	文献略号	所属ガッチャ等	年代
Jinadāsa (?)	UttC	Vāñija kula, Koḍiya gaṇa, Vayara śākhā	593-693 年に生存 (?)
Śāntisūri	UttŚ	Thārāpadra Gaccha	1039 / 1040 年に死去
Nemicandra	UttNe	Bṛhad Gaccha	1072 年に UttNe 作
Jñānasāgara	UttJñ	Tapā Gaccha	1384 年に UttJñ 作
Jayakīrti	UttJa	Añcala Gaccha	1426 年に UttJ 作
Kamalasamyama	UttK	Kharatara Gaccha	1487 or 97 年に UttK 作 ⁹
Bhāvavijaya	UttBh	Tapā Gaccha	1632 年に UttBh 作
Lakṣmīvallabha	UttL	Kharatara Gaccha	1688 年に UttL 作

2. Utt 2章における pāthāntara の具体事例

2.1 Utt 2.2

まず、Utt 2.2 を取り上げてみよう。CHARPENTIER 版では、Utt 2.2 は以下のようにある：

digimchāparigae dehe tavassī bhikkhū¹⁰ thāmavam

na chinde na chindāvae na pae na payāvae

肉体が飢えによって取り囲まれた時、苦行をし踏ん張る力のある托鉢修行者は〔果実などを〕切るべきではなく、切らせるべきではなく、調理するべきではなく、調理させるべきではない。

下線部 a 句を UttŚ の刊本は digimchāparitāveṇa 「飢えの苦痛によって」とするが、CHARPENTIER・JĀS・Nava Suttāni [NS] 各版の注記によると、Utt 本文にこの読みを持つ現存写本は一切存在しない。その限りでは、UttŚ が採用する読みは「現存」写本の「本文」とは乖離する。しかし、UttŚ 版の選択には十分な理由がある。それは、UttŚ が先に註釈する読みが digimchāparitāveṇa の方であり、digimchāparigae dehe という伝承を彼は pāthāntara として扱っているという事実である。

即ち、Utt 2.2 に対する註釈冒頭において、UttŚ (83b,12) は “digimchā ukta rūpā tayā paritāpaḥ ... digimchāparitāpas ...” 「既に述べた〔ような〕特色の飢えがあり、それによる paritāpa… が飢えによる苦痛である…」とし、直後に “pāthāntaram digimchāparigate bubhuksāvyaṅgā dehe śārīre” 「別の伝承として — dehe [即ち] 身体が digimchāparigate [即ち] 食べたいという気持ちで満たされている時に」(84a,1) と述べる。つまり、UttŚ によれば現行 Utt 2.2a の digimchāparigae dehe はあくまで別の伝承で、第一に解釈を与えられるべきは digimchāparitāveṇa なのである¹¹。

さて、これら2つの伝承は UttC に遡ることが判明しているが、UttC の場合は事情が複雑である。UttC (52,6) はまず “digimchāparigate dehe silogo” 「digimchāparigate dehe [で始まる] シュローカがある」とする。この限りでは、UttC は現行 Utt と同じ読みの伝承のみを知る如くである。ところが直後 (52,6-8) の説明は “digimchā nāma desīto khuhā-abhihāṇam, pari samantāt tāpaḥ paritāpaḥ, digimchayā paritāpo, tena hi digimchāparitāpeṇa tapassī bhikkhū thāmavam...” である。つまり UttC は digimchāparitāpeṇa という読みだけを実際は説明するのである。UttC の校訂者がいかなる UttC 写本を用いたのか、また校訂に際しての variants も一切不明である現状ではこれ以上追及することは困難だが、UttC も UttŚ が筆頭に掲げる digimchāparitāpeṇa という読みを知る点は確実である。

以上を承けた UttNe は、理由は不明だが¹² pāthāntara の方を選び、“digimchāparigate kṣudhāvyaṅgā dehe śārīre sati tapasvī ...” という解釈のみを提示する (p.32,1.23)。そして、UttNe 以降の諸註釈は、Utt2.2a の読みに関し全て UttNe に倣う恰好となる。列挙すると以下の通りである：

UttJñ (365a,14)	bubhuksāvyaṅgā dehe sati sthāma samyamaviṣayas ...
UttJa (p.24,1.18)	<u>digimchā kṣuttayā parigate vyāptadehe sati tapo 'syāstīti tapasvī ...</u>
UttK (p.47,1.21)	<u>digimchāparigate kṣudhāvyaṅgā dehe tapasvī ...</u>
UttBh (51,6)	<u>digimchāparigate kṣudhāvyaṅgā dehe śārīre sati tapasvī ...</u>
UttL (p.24,1.6)	tapasvī sādhuḥ <u>digimchā kṣudhā tayā parigate vyāpte dehe sati ...</u>

UttNe 以降の諸註釈者は、a 句については UttŚ が別伝承とした方にのみ註を記した後、すぐに b 句の解釈に進み、a 句のもう一方の伝承には無関心である。2 つの伝承の存在自体を彼らが知っていたかどうかすら不明である。また最初に述べた通り、異読情報を提示する CHARPENTIER, JĀS, NS の各版に拠る限り、UttŚ が第一の伝承とした読みは、Utt2.2a の異読としては一切出現しない。従って、少なくとも Utt2.2a の事例だけを見れば、恰も UttNe が単一の読みだけに解釈を提示したことが、却って Utt 自体の伝承を固定化させたかの如くである。

尤も、この例の場合、どちらの伝承であれ詩節の趣旨には大差を生まない点で、そこまで問題とするべきではないという意見はあるかも知れない。では、以下に挙げる 2 例はどうだろうか。最初の例は、一見すると UttNe が hapax legomenon を捨てたかの如く取りうる事例である。

2.2 Utt 2.35

Utt 2.35 は、CHARPENTIER 版によると以下の如くである：

āyavassa nivāeṇa aulā havai veyanā

evaṃ naccā na sevanti tantujaṃ tanatajjiyā

〔太陽〕熱の降下により、比類なき苦痛が生じる。かように認識した後、草に脅かされている者たちは糸から生じるもの（=衣）になじまない。

Utt 2.35 については、CHARPENTIER が注記 (p.289) で指摘する通り、d 句 tantujaṃ に対し tantayam (Skt. tantra) という pāṭhāntara のあることが知られているが、ここでは CHARPENTIER が指摘しない b 句 aulā を取り上げる。UttŚ 版ではこの箇所は tidulā と校訂されるが、CHARPENTIER は異読を回収しておらず、JĀS 版及び [NS] 版でも Utt 本文自体の伝承としては atulā あるいは aulā で一貫する。しかしこの箇所でも、UttŚ は先に ti(d)ulā を説明し、aulā は pāṭhāntara のひとつとして扱われるに過ぎない。つまり (121b,9f) “... tiula tti sūtratvāt taudikā yadvā trīn prastāvāt manovākkāyān vibhāṣitanyantatvāt curāḍīnām dolatīva svarūpacalanena tridulā, **pāṭhāntaras** tu atulā vipulā vā ...” とあり、UttŚ はまず ti(d)ulā に対して説明を与え、atulā は別伝承として扱われるのである。

そして、ti(d)ulā という伝承も、先と同様 UttC に遡る。UttC (79,5) は “tiulā hoi vedanā tudatīti tiulā vedanā” という解釈のみを与え、a(t)ulā あるいは vipulā に全く触れない。他の詩節では UttC が pāṭhāntara にしばしば触れることを考慮すると、当該詩節において UttC は ti(d)ulā 以外の読みを知らない想定するべきであろう。尤も、a(t)ulā または vipulā が、UttC が作成された時代の Utt の伝承で既に存在したか否かは確定し難しい。UttC 以降、UttŚ が作成される間に、ti(d)ulā の理解に困難を感じた者たちにより a(t)ulā / vipulā が生み出された可能性も否定はできない。

このように、UttC 及び UttŚ が伝承の筆頭として ti(d)ulā を取り上げる以上、それを承ける UttNe もこの読みを選択するべきかと思われるが、UttNe (p.79,1.18) は “atulā mahatī bhavati vedanā” として pāṭhāntara である a(t)ulā にだけ説明を行なう。ti(d)ulā を放棄した理由については推測の域を出ないが、その理由のひとつとして、サンスクリット語に遡り難く難解な tiulā より、

分かりやすい — ‘sukhabodha’ な — a(t)ulā を選択したと想定することは許されるのではないか。UttC の √tud に遡らせる説明も、あるいは UttŚ の taudikā や tridulā というサンスクリット語形も、無理があることは明白だからである。そして、UttNe 以降の註釈における状況は以下の通りである：

UttJñ (369a)	註釈なし
UttJa (p.44,l.20)	ātapasya gharṁasya nitarāṁ pātena [^] atulā vedanā syāt ...
UttK (p.113,l.5)	... nipātena [^] atulā mahatī bhavati vedanā pīḍā ...
UttBh (159,7)	ātapasya gharṁasya nipātena sampātena atulā mahatī bhavati vedanā ...
UttL (p.47,l.19)	... ātapasya nipātena gharṁasya samyogena [^] atulā vedanā bhavati ...

Utt 2.35ab に註釈しない UttJñ は兎も角、UttJa 以降は全て atulā で固定される。彼らが ti(d)ulā あるいは vipulā という別伝承を知っていたか否かは不明だが、仮令それを知っていたとしても、彼らにとってそのような読みが考慮外だったかのように見える。彼らにとっては、嘗て pāṭhāntara だった a(t)ulā が正当な伝承になっていたと考えられる。このようないわば伝承の一本化は、ここだけを見れば UttNe が端緒で、かつその伝統が現存 Utt 写本本文の伝承、また現代人による批判的校訂にまで影響を与えているかの如くである。確かに ti(d)ulā という読みは難解であり、この読みを選択したとしても、その意味は判然としない難点がある。しかし、本文批評に際して古い伝承を重視し、かつ所謂 *lectio difficilior potior* の原則に立つとすれば、明らかにその両者を満たす tiulā は「原」Utt を想定する上で考慮の対象とする必要があろう。

次に、いずれの伝承も意味は明確なものの、明らかに異なる意味を提示する例を挙げてみよう。

2.3 Utt 2.4

Utt 2.4 は、CHARPENTIER 版によれば以下の如くである：

tao puṭṭho pivāsāe doguṁchī lajjasamjajae
sīodagaṁ na sevijjā viyaḍassesaṁ care

その後、渇きによって触れられ、〔無自制を〕嫌悪し、羞恥心について自制している者は冷水に馴染むべきではない。変化した〔水〕の探求を実践するべきである。

当該詩節は、初期のジャイナ教で羞恥心という心理作用がいかなる役割を果たすと理解されていたかを窺える貴重な例であり、羞恥心(慚愧)を重視する仏教との比較研究にとっても有意の資料を提供する如くである¹³。ところが、CHARPENTIER も注意を促した通り (p.284)、UttŚ の刊本は下線部に対し laddhasamjame 「自制を獲得した者は」を採用する。そしてこの場合も、Utt 自体の写本伝承ではその読みを保持するものはない一方、UttŚ は第一にこの伝承に対して解釈を与えるのである。即ち、UttŚ (86a,8-11) は “ata eva labdhaḥ avāptaḥ samyamah ... pāṭhāntaram vā lajjasamjame tti lajjā pratītā samyamah uktaṛūpaḥ ... paṭhyate ca lajjāsamjajae[sic] tti tatra lajjāyā[sic] samyag yatate ...” とする。この冒頭の解釈を見る限り、UttŚ が最初に註釈を付けた読みが laddhasamjame / -samjamo だったことを疑う余地は全く存在しない。そして、現行 Utt 2.4b が提示

する読みは UttŚ にとって第3の pāthāntara なのである。

そしてこの場合も、UttŚ が提示する3つの伝承のうち2つは UttC に遡り得る。即ち UttC (54,11f.) には “laddho samjamo jeṇa sa bhavati laddhasamjamaḥ paṭhyate ca lajjasamjate lajjā eva samjamo, lajjāte vā asamjamam kāuṃ tayā lajjāyā samjamatīty arthah” 「ある者によって自制が獲得されていれば、その者は laddhasamjama となる。そして lajjasamjate と [も] 伝承されている。自制とは羞恥心に他ならない。あるいは、羞恥心ゆえに、無自制を為した後ではそういう羞恥心によって自制をする、という意味である」とあり、UttC も laddhasamjame / -samjamo を第一の伝承として現行 Utt 2.4b の提示する読みを pāthāntara とする点では変わりがない。

以上の状況に対して UttNe (p.34,l.17) は、またも理由は不明ながら “lajjāyām samyame samyag yatate lajjāsamyataḥ” 「lajjāyām [つまり] 自制について正しく努力するのが lajjāsamyata」とし、UttŚ が第3の pāthāntara として挙げた伝承のみを選択する。では UttNe 以降の諸註釈はどうか：

UttJñ (365b,9)	lajjāyā samyag yatate kṛtyam pratyādrto bhavatīti <u>lajjāsamyataḥ vikṛtasya</u> ...
UttJa (p.25,II.26f.)	<u>laddhasamjame</u> labdhasamyamo yadvā lajjāyā samyag yatate kṛtyam pratyādrto bhavatīti <u>lajjāsamyataḥ śītodakam</u> ...
UttK (p.49,I.16)	lajjāyā sam samyag yatate kṛtyam pratyādrto bhavati <u>lajjāsamyataḥ śītodakam</u> ...
UttBh (55,3f.)	<u>lajjasamjate</u> tti lajjāyām samyame samyak yatate iti <u>lajjāsamyataḥ śītodakam</u> ...
UttL (p.25,II.16f.)	<u>lajjasamyato</u> lajjāyām sam samyak yatate yatnam kurute iti <u>lajjasamyato</u> ...

ここで注目されるのは、UttJa が laddhasamjame と lajjasamjate という双方の読みを明記し、かつ UttC 等と同じく前者にまず解釈を加える点である。このことは、少なくとも15世紀前半の Añcala Gaccha において、laddhasamjame という伝承がなお正当なものとして重視されていたことを示している。また先に予想したような、UttNe による Utt の読みの固定化は、少なくとも Añcala Gaccha が保持した Utt の伝承には適用されないことになる。とはいえ、CHARPENTIER, JĀS, NS の各版が使用し得た諸写本の本文伝承が、UttNe の一本化した読み以外には存在しない以上、伝承の固定化において UttNe が何らかの役割を果たした可能性も現時点では排除することはできない。更に、lajjā という語彙を含む伝承が、少なくとも UttC や UttŚ の段階では複数の伝承の内の一のみに過ぎず、また「別の伝承」として扱う以上、当該箇所を白衣派の少なくとも「初期」における羞恥心概念を示す例、と受容することにも、一定の留保が必要になるであろう。

さて、このように UttNe 以降の諸註釈で別伝承が忘れられることなく生き残っている例は、Utt 2章では他にも見出される。以下にはその別の例を示そう。

2.4 Utt 2.17

Utt 2.17 において CHARPENTIER の提示する原文は以下の通り：

eyam¹⁴ ādāya mehāvī paṃkabhūyā u itthio
no tāhiṃ viṇihammejā¹⁵ carejj’ attagavesae

さて、ぬかるみのようなものが¹⁶ 女たちだ [と] このことを聡明な者は受け入れて、彼女たちによって打ちのめされるべきではない。アトマンの探求者として実践するべきである。

問題は a 句 *ādāya* である。CHARPENTIER・JĀS・NS の各版が用いた諸写本では尽く *ādāya* とある一方、UttŚ の刊本は *ādāya* ではなく *ānāya* を正当な読みとして採用する。これも、CHARPENTIER が注意する (p.287) 通り、UttŚ が後者を筆頭の伝承として註釈を行なうが故である。今必要な箇所のみを抜き書きすると、UttŚ (104a,6-9) には “evam ... ājñāya svarūpābhivyāptā avagamyā medhāvī avadhāraṇaśaktimān ... paṅkabhūtā striyaḥ, paṭhyate ca evam ādāya mehāvī jahā eyā lahussaga tti” とある。これに基づけば、UttŚ が先に evam ānāya mehāvī paṅkabhūyā (u)itthio という読みの原文に説明をしていることは明らかである。a 句が *ādāya* となるのは、UttŚ にとっては「別の伝承」である（そして、その伝承の場合、b 句も大幅に相違することには注意せねばならない）。

更に、UttŚ が伝える読みは UttC から見られるものだが、先と同様事情は幾分複雑である。まず UttC (66.1) は “evam ātāya medhāvī silogo” 「evam ātāya medhāvī [で始まる] シュローカがある」と述べ、これを見ると UttC は *ātāya* つまり *ādāya* という伝承を見ていた如くである。ところが、その直後 (66.2) では “evam anena prakāreṇa evam ājñāya evam uvalabhyety arthaḥ, paṭhyate ca evam ādhāya[sic]¹⁷ medhāvī etat pariñānam ādayeti jahā eyā lahussigā ity-ādi ...” とある。読みに乱れがあるものの、いずれにせよ UttC が先に説明するのが *ādāya* ではなく *ānāya* であることは明白であり、また b 句についても UttŚ と同じ別伝承を知っていることが注目されるだろう¹⁸。そして、以上を踏まえた UttNe (p.49,l.1) は、a 句に “evam anantaram vakṣyamāṇam ādāya buddhyā grhītvā medhāvī ...” とのみ解釈し、b 句の別伝承には全く触れない。では、UttNe 以降はどうであろうか：

UttJñ (367b,4)	<u>evam ājñāya buddhyā medhāvī paṅkabhūtāḥ mālinyahetutvena ca ...</u>
UttJa (p.34,ll.13-16)	<u>evam ājñāya jñātvā medhāvī avadhāraṇaśaktimān paṅkabhūtā muktīpatham yātām vighnatvena mālinyahetutvena ca tuḥ evārthaḥ (pāṭhāntare evam ādāya mehāvī jahā eyā lahussagā) evam vakṣyamānārtham ādāya buddhyā lātvā yathā etāḥ striyas tucchāsayādinā laghvayaḥ ...</u>
UttK (p.66,ll.11f.)	<u>evam anantaroktam artham ādāya buddhyā grhītvā medhāvī dhīmān paṅkaḥ kardamas tadbhūtā evam muktīpathapravṛttānām vibandhakatvena striyo ...</u>
UttBh (91,11f.)	<u>etam anantaram uktaṁ vakṣyamāṇaṁ cārtham ādāya buddhyā grhītvā medhāvī tam evāha paṅkaḥ kardamas tadbhūtā muktīpathapravṛttānām vighnakaratvena mālinyahetutvena ca tadupamā eva tur avadhārane striyo bhavanfity avadhārya ...</u>
UttL (p.34,ll.24-26)	<u>medhāvī ... evam ādāya^etat jñātvā ... striyaḥ paṅkabhūtāḥ muktīmārge kardamabhūtāḥ ...</u>

ここでも UttJa が明確に二つの伝承の存在を認識しているが、それ以上に注目されるのは、UttBh が *ādāya* にしか註釈をしないのに対し、同じ Tapā Gaccha に属し UttBh より 550 年近く前の註釈である UttJñ が、*ānāya* にのみ説明を与える点である。UttJñ が *ādāya* を知っていたか否かは定かではないものの、UttNe 出現後の 11 世紀の Tapā Gaccha においても、UttNe による一本化の影響を受けることなく、*ānāya* が正当な伝承の位置を占め第一に解釈を提示されていた事実は重要である。その一方、同じく Tapā Gaccha に属する、遙か後代の UttBh が他の Gaccha の註釈家たちと同じく *ādāya* のみを選択する事実は、UttJñ から UttBh に至る期間のいずれかの時点で、読みの固定化が図られたか、あるいは UttNe の影響を UttBh が受けたことを示唆するであろう。

3. おわりに

以上、Utt 2章における pāthāntara をめぐる諸問題を確認してきた。本稿の最初(←1.)で述べた通り、今回確認した諸例においては、CHARPENTIER・JĀS・NSの各版が利用し得た写本に出現する Utt 本文の読みは、paper manuscript であれ palm-leaf manuscript であれ、全て UttNe が選択した読みと一致していた(←2.1-4)。つまり、どれだけ古い写本を用いようと、写本レベルで示される Utt 本文の読みについては UttNe より古い情報には遡り得ないし、写本において優位な読みは結局 UttNe が選択した読みに過ぎないわけである。このような状況を勘案すると、我々は Utt の校訂に際し、単に古写本を重視するという態度を取ることは慎重にならざるを得ない。

その一方で、UttC や UttŚ が提示していた pāthāntara が、UttNe 以降完全に忘れ去られていたわけではなく、ある場合には pāthāntara のみに註釈を行ない(←2.3)、また UttC や UttŚ を踏襲したような註釈を施す例もあった(←2.3, 2.4)。従って、UttNe が現行 Utt の読みを固定化したのではないかという、筆者による当初の単純な予想(←1.)は、完全に否定されることはないであろうが、大幅な修正を必要とする。

我々が「白衣派聖典」と呼ぶ際の「聖典」なるものが、いつ、どこで、どのようにして固定化されたのかは、未だ解決を見ていない問題である。それは Utt だけのことに止まらない。幸い、Utt には膨大な量の写本と、UttC 以降連綿と各 Gaccha において作成され続けた多くの註釈が存在するが、本稿は variants については既存刊本が提示するものを間接的に確認し得たのみであり、註釈については僅か8種を用いたに過ぎない。ゆえに今後の課題としては、実際に Utt 諸写本を確認しながら、今回のような調査を Utt 全章に亘って、かつ利用する註釈も広げて精査することが挙げられよう。その作業を通じ、白衣派聖典の固定化という問題に関し手掛かりを見出し得る可能性がある。この作業は、未だ十分に研究が進んでいない、中世白衣派の各 Gaccha に関する研究、特にその聖典の受容史・解釈史、また各 Gaccha 間の交流史の解明にとっても、不可欠なものと思われる。

【一次文献】

- Utt *Uttarajjhāyā*
- (1) Jahr CHARPENTIER, *The Uttarādhyayanāsūtra Being the First Mūlasūtra of the Śvetāmbara Jains*, Uppsala, 1922.
 - (2) PUṆYAVIJAYA & Amritlāl Mohanlāl BHOJAK, *Dasaveyāliyasuttam, Uttarajjhayaṇāṇi and Āvassayasuttam*, Jaina-Āgama-Series No.15, Bombay, 1977.
 - (3) MAHĀPRAJÑA, *Nava Suttāṇi*, Ladnun, 1987.
- UttK Kamalasaṃyama's Commentary on Utt
- JAYANTAVIJAYA, *Sarvārthasiddhiṅkayā samalāṅkṛtāni Uttarajjhayaṇāṇi Bhāg 1*, revised by

VAJRASENAVIJAYA & CANDANBĀLĀ, Ahmedabad, 2009.

- UttC Jinadāsa's (?) Commentary (*Cūrṇi*) on Utt
ĀNANDASĀGARA, *Śrīmant Uttarādhyayanāni Jinadāsagaṇimahattara kṛtayā Cūrṇyā sametāni*, Ratanapura, 1933.
- UttJa Jayakīrti's Commentary on Utt
Hīrālāl HAMSARĀJ, *Paramapūjyagacchādhipa-Jayakīrttisūriviracita-Dīpikāṭīkāsamalamkṛtāḥ Uttarādhyāyāḥ, Bhāg I*, revised by CANDANBĀLĀ, Ahmedabad, 2009.
- UttJñ Jñānasāgara's Commentary on Utt
KAÑCANAVIJAYA, *Cirantanācāryaviracita-sakathānaka-laghuvṛttirūpāvācūr[ṇ]yupetāni Śrī Uttarādhyayanāni, uttarārdhaḥ*, Sūriyapūrīya, 1967.
- UttNe Nemicandra's Commentary on Utt
VIJAYOMANGA, *Bṛhadgacchīya-Śrīman-Nemicandrācāryaviracita-Sukhabodhānāmyā vṛtṭyā samalaṅkṛtāni Śrī Uttarādhyayanāni, Bhāg I*, Ahmedabad, 2003.
- UttBh Bhāvavijaya's Commentary on Utt
RATNAVIJAYĀ, *Pūjyapāda-mahopādhyāya-Śrīmad-Bhāvavijayaṇi-viracitayā vivṛtṭyā samalaṅkṛtam Śrīmad Uttarādhyayanasūtram*, Ahmedabad, 2004.
- UttL Lakṣmīvallabha's Commenatry on Utt
VAJRASENAVIJAYA & BHOGYEŚAVIJAYA, *Śrī-Lakṣmīvallabhagaṇiviracita-ṭīkāsametam Śrī Uttarādhyayanasūtram, Bhāg I*, Ahmedabad, n.d.
- UttŚ Śāntisūri's Commenatry on Utt
ĀNANDASĀGARA, *Śrīmad-Bhadrabāhusvāmīsūkta-Niryuktikāni Vādivetāla-Śrī-Śāntisūrivarya-vivṛtāni Śrīmantuyuttarādhyayanāni, vibhāgaḥ prathamah*, Bambaī, 1916.
- Tand *Tandulaveyāliya*
Walther SCHUBRING, *Tandulaveyāliya: Ein Painṇaya des Jaina-Siddhānta*, Wiesbaden, 1969.

【二次文献】

BALBIR, Nalini

(2003) "The A (ñ) calagaccha Viewed from Inside and from Outside," in: Olle QVARNSTRÖM (ed.), *Jainism and Early Buddhism: Essays in Honor of Padmanabh S. Jaini*, Part I, Fremont, 47-77.

(2009) "Les lecteurs Jaina Śvetāmbara face à leur canon," in: Gérard COLAS & Gerdi GERSCHHEIMER (eds.), *Écrire et transmettre en Inde classique*, Paris, 43-62.

BRUHN, Klaus

(1987) "Das Kanonproblem bei den Jainas," in: Aleida ASSMAN & Jan ASSMANN (eds.), *Kanon und Zensur: Beiträge zur Archäologie der literarischen Kommunikation II*, München, 100-112.

CAILLAT, Colette

- (1993) “Words for Violence in the “Seniors” of the Jaina Canon,” in: Rudy SMET & Kenji WATANABE (eds.), *Jain Studies in Honour of Jozef Deleu*, Tokyo, 206-236.

Dundas, Paul

- (1996) “Somnolent Sūtras: Scriptural Commentary in Śvetāmbara Jainism,” *Journal of Indian Philosophy* 24-1, 73-101.
- (2000) *The Jains*, Second edition, London & New York.
- (2007) *History, Scripture and Controversy in a Medieval Jain Sect*, London & New York.

EMMRICH, Christoph

- (2011) “Śvetāmbaras, Digambaras und die Geschichte ihres Kanons als Besitz, Verlust und Erfindung,” in: Max DEEG, Oliver FREIBERGER & Christoph KLEINE (eds.), *Kanonisierung und Kanonbildung der asiatischen Religionsgeschichte*, Wien, 105-129.

FOLKERT, Kendall W.

- (1993) *Scripture and Community: Collected Essays on the Jainas*, edited by John CORT, Atlanta.

JAIN, Uttam Kamal

- (1975) *Jaina Sects and Schools*, Delhi.

KAPADIA, Hiralal Rasikdas

- (2000) *A History of the Canonical Literature of the Jainas*, Ahmedabad.

河崎 豊

- (2008) 「白衣派ジャイナ教徒の羞恥心」『印度学仏教学研究』 57-1, 301-296.

MEHTĀ, Mohanlāl

- (1989) *Jain Sāhitya kā Brhad Itihās Bhāg 3: Āgamik Vyākhyāyem*, Vārāṇasī (2 nd edition) .

POTTER, Karl H. & BALCEROWICZ, Piotor

- (2013) *Encyclopedia of Indian Philosophies Volume XIV: Jain Philosophy Part II*, Delhi.

VELANKAR, Damodar Hari

- (1944) *Jinaratnakośa: An Alphabetical Register of Jain Works and Authors Vol. I Works*, Poona.

WILES, Royce

- (1997) *The “Śvetāmbara Canon”: A Descriptive Listing of Text Editions, Commentaries, Studies and Indexes*, Canberra.
- (2006) “The Dating of the Jaina Councils: Do Scholarly Presentations Reflect the Traditional Sources?” in: Peter FLÜGEL (ed.), *Studies in Jaina History and Culture: Disputes and Dialogues*, London & New York, 61-85.

ヴァインテルニッツ、M.

- (1976) 『ジャイナ教文献 — インド文献史 第4巻 —』 中野義照訳, 高野町 .

*本稿は2012年2月3日に筑紫女学園大学で開催された研究会での筆者の発表内容を基礎とする。宇野智行博士と小林久泰博士からは発表時に多くのご指摘を賜り、宇野博士からは数々の貴重書をご提供賜った。また、2011年10月から2012年1月にかけて大阪大学大学院文学研究科で開催した学習会と、2013年10月から2014年1月にかけて京都大学大学院文学研究科で担当した演習でUtt 2章を取り上げ、同章の解説について多くの議論をすることができた。ここに記して感謝申し上げます。

注

¹ ジャイナ教の「聖典」概念自体が抱える諸問題には触れる余裕がない。最近の研究としては BRUHN (1987), FOLKERT (1993:35-93), EMMRICH (2011) などを参照されたい。

² WILES (2006:61) 及びそこで引かれる諸研究を参照されたい。

³ これについては、KAPADIA (2000:58f.) を参照されたい。また、ヴィンテルニッツ (1976:331f.) にも紹介されている。

⁴ これについては、DUNDAS (1996:79f.) 及び DUNDAS (2007:76) を参照されたい。なお WILES (2006:76 [note 1]) では、Abhayadeva の時代の少し前には聖典 (の少なくとも大部分) の editing が完了したのではないかとされているが、WILES がそのように看做す根拠は明記されていない。

⁵ 但し、Nāgārjunīya 伝承と呼ばれるものは、これまでしばしば言及されてきた。特に、BALBIR (2009) は Nāgārjunīya 伝承の一覧を提示し、白衣派ジャイナ教聖典の伝承を考える上での基礎資料を提供する。

⁶ MEHTĀ (1989: 268) は 593-693 年を想定する。UttC の作者が誰であれ、それを UttŚ 以前とすることを筆者は作業仮説として有効と考え、また本稿で示す具体事例からも、UttŚ が UttC を踏まえていると想定することは妥当性を持つと思われる。しかし、POTTER & BALCEROWICZ (2013:286) は Jinadāsa の年代を 12 世紀初頭に置く説を採用するが、その根拠は明確ではない。なお、UttC を Jinadāsa 作とするのは校訂者 ĀNANDASĀGARA の想定に過ぎず、UttC 自体の praśasti 等に著者名が明記されているわけではない。この点については KAPADIA (2000:176) も参照されたい。

⁷ UttNe のこのような性格は、夙に CHARPENTIER が Utt 校訂本の Introduction (p.57) で指摘した通りである。また MEHTĀ (1989: 415f.) も参照されたい。

⁸ UttJñ 以下の諸情報は、VELANKAR (1944) あるいは WILES (1997) に基づく。WILES (1997) によれば、Utt には少なくとも 60 種の註釈があることが指摘されているが、現在では入手が極めて困難なもの、あるいは未だ校訂されていないものも多い。今回取り上げた諸註釈は、筆者がこれまでに入手し得たものを可能な限り用いたのであり、恣意的な選定をしたわけではない。但し、UttJñ 刊本の本文に付される ‘Cīrantanācārya’ の註釈については、この「古師」なる人物の素性が今のところ一切不明であり、議論を却って混乱させる恐れがあるため、今回は用いなかった。この註釈については独立して検討される必要があるだろう。なお、各 Gaccha について簡便には JAIN (1975:49-74) を参照されたい。また、Kharatara Gaccha 及び Tapā Gaccha については差し当たり DUNDAS (2002:140-145) と、後者については特に DUNDAS (2007) を、Añcala Gaccha については BALBIR (2003) を参照されたい。BALBIR (2003) に従えば、Añcala

Gaccha は A(ñ)cala Gaccha と表記されるべきだろうが、本稿では UttJa 校訂本の表記に従い Añcala Gaccha という呼称を用いた。

⁹ VELANKAR (1944:44) は UttK が samvat 1554 年に執筆されたとする。しかし、UttK 再版にあたり CANDANBĀLĀ が寄せた序文 (p.13) では、それよりも 10 年早い 1544 年に作成されたとする。この 10 年の差について、現時点の筆者は審らかにし得ない。

¹⁰ CHARPENTIER はこの読みに対し一切 variants を挙げない。CHARPENTIER 以外に bhikkhū と読むのは UttL の版のみだが、韻律上は異例である。これに対し他刊本は全て bhikkhu と読む上、JĀS 版は bhikkhu 以外の variants を回収し得ていない。

¹¹ CHARPENTIER (p.283) は、“Ś gives *digimchāpariyatte* = °*tapte*, and does not mention the reading °*parigae*” と述べる。これは、彼が UttŚ を参照する際に用いた Berlin Mss. no.703-706 の状態に起因する可能性もあるが、詳細は不明である。

¹² これについては、Utt 2.8a に *usiṅapariyāveṇaṃ* という類似の表現が出るのを UttNe が嫌った可能性がある。あるいは、そもそも *digimchāparitāveṇa* という表現自体が *usiṅapariyāveṇaṃ* の影響を被った読みの可能性もあるが、いずれも推測の域を出ない。

¹³ 河崎 (2008) を参照されたい。なお、当該節にて言及する *pāṭhāntara* をめぐっては、河崎 (2008:297) でもごく簡単に言及している。

¹⁴ CHARPENTIER 版と UttBh の版以外は全て *evam* と校訂する。UttBh の版には *eam* とあり、UttBh は *etam* と説明している (91,11)。JĀS 版によると、彼らが用いた最古の写本である *sa1* が *etam* と読み、2つの紙写本 *lā1*、*lā2* が *eyam* という読みを持つという。既に UttC (66.1) は *evam* とある。もっとも、*-y->-v-* はあり得るため、本来 *eyam* とあったものが *evam* と伝承されていった可能性は考慮する必要がある。

¹⁵ *-mm-* 音を取るのは CHARPENTIER 版だけであり、インド諸版は全て *-nn-* もしくは *-ṇṇ-* とする。当該節に関しては、CHARPENTIER が使用し得た写本には *-mm-* と読むものも存在したようであるが、Utt 2.22 に対し彼が記した注記 (p.287) によると、CHARPENTIER は全写本が *-nn- / -ṇṇ-* を示していても、それが *Passive* であることが明白な場合は *-mm-* に訂正するという方針を取っている。しかし、*Passive hanna-* が許容されていたことについては、CAILLAT (1993:217 & 232f. [note 64]) を参照されたい。

¹⁶ 女性を *paṃka* とする例は、Tand (p.19,l.24) にも見られる。

¹⁷ JĀS 版の引用では *ādāya* となっている。

¹⁸ *b* 句の *pāṭhāntara* について、JĀS 版が UttŚ にのみ存在するかの如く記載するのは誤解である。

(かわさき ゆたか：人間文化研究所 客員研究員)